

# 心がふれあう出会い

日常の何げない出会いの中にも、キラリと光る、心に刻まれる出会いがあります。それは、どのようなときなのでしょう。

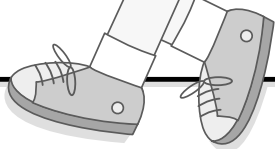


# 「ふれあい」を求めて

「人はふれあいを求めて生きている」といつても言い過ぎではないでしょう。

私たちは、日常の中でのふれあい、つまり親や家族、周囲の人々の何気ない話やしぐさ、まなざし、表情などをとおした気持ちの交流の中から、愛情の確認をしながら生きています。人は、愛情にふれていないと生きていくことが不安で、つらいときえ感じるものです。心がふれあうと、人は勇気や優しさが胸の奥に湧き上がり、生きるエネルギーが満ちてきます。

今回は、ある出会いのドラマをとおして、「心がふれあう出会い」について考えたいと思います。



# 100万歩の散歩道

岐阜市に住む下里正臣さん(76歳)

は、十六年前に定年を迎えました。

長年、市民の健康や福祉の仕事に携

わってきた下里さんは、自分の健康

を保つこともかねて、自分が生まれ

育った町や仕事で訪れた町、さらに

その周辺などを歩いて、土地の特色

や事跡などを書き残しています。

「地元のことを書き残すのは地元へ

の愛着です。私はこれまで地元の方

々の人々のお世話になってきました。

つまり、この土地に育ててもらった

わけですから、私流の恩返しのようなも

のです」と話す下里さん。

これまでに書きためたものは自費出版

され、数冊の記録集になっています。そ

の中に『岐阜市の健康散歩みち百万歩』



素晴らしい出会いと感動』があります。

下里さんが歩いた地域の人々や産物、

歴史的な事跡などが写真とともに紹介さ

れています。それに加えて「聴覚に障

害のある青年」「毎日をもつたいたいとい

うおばあちゃん」「故郷に戻って生き返つ

たという熟年男性」など、〆百万歩の散歩

みち〆で出会った人々のことがエッセイ  
風につづられています。

それらを読むと、「わが町」「わが地域」

に心から愛着を抱いている下里さんの人

柄が浮かび上がってきます。

そんな下里さんには、七年前の、ある女

子高校生との出会いが心に残っています。



# 無人駅での出会い

初夏のある日、「健康散歩」に出かけた下里さんは、しばらく電車で揺られたあと、田舎の無人駅に降り立ちました。数人の女子高校生もいつしよでした。

こういうとき、下里さんはよく方角を間違えて、以前にも大変な目に遭ったことがあります。この日も、その不安が心をよぎりました。

「あー、『やすらぎの森』は、あちらだったかね？」

下里さんが女子高校生に尋ねてみると、そのうちの一人が近寄って来て、ここにこしながら答えてくれたのです。

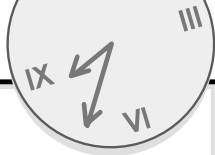
「はい、そうです。けど、あそこ分かりますか？ はい、そうです。よかつたら案内しましょうか。おじさん、ちよつと待つてて」

彼女は小走りで友だちのいる所へ行ったかと思うと、ほんの一、二分で戻ってきました。どうやら、みんなの了解を得てきたようでした。

「だいたいの道順を教えてくださいいんだよ」と下里さん。

「はい……。あのね、場所はあちらのほうです。距離は二キロぐらいかな。そう遠くはないけど、途中で道が曲がりくねってるし、いくつかに分かれているので説明がしにくいんです。やつぱり、案内します。私、そのほうが安心ですもん」

下里さんは、躊躇しましたが、もう、先に立つて歩きはじめている彼女を見て、その好意に甘えようと考え、「すまんねえ。それじゃ、無理言おうか」と、道案内を頼んだのでした。



## 沈黙の数分

二人は、駅前の静かな街並みをつらぬきと散策し、雑貨店の横を左へ折れました。目の前に初夏の水田風景が広がりました。水面のキラキラとした輝きが心地よく感じます。

下里さんがあぜ道に入って辺りの風景に見入っていると、

「おじさん、何しとるの？ 行きますよ！」

と、彼女の大きな声が響きました。

急いで戻ると、彼女は待ち兼ねて

いたかのように、再び友だちや先生

の話を続きをはじめました。いつか話題

は歌手や俳優のうわさ話に発展し、

時折、鼻歌まで飛び出しました。

彼女の絶え間なく続く話を聞きながら、

下里さんは久し振りにふれる豊かな自然



を満喫まんきつしていました。

ところが、しばらくすると、今まであんなに明るかった彼女が、急にしゃべらなくなったのです。見ると、うつむき加減げんでついてきます。

「どうかしたの？ 気分、悪いの？」

「いいえ……」

「気になること、あるの？」

「……」

「何でも話してごらん。友だちのこと？」

家のこと？ 彼のこと？」

「……」

「何か、乙女心おとめこころを傷つけるようなことを言っただらうか？」

下里さんがそう思っ振ふり向くと、彼女はハンカチで目頭めがしらを押さえながらむせび泣きをしています。

「どうしたらいいんだらう？」

その瞬間です。

「あのー……」と、小さな声が……。

「あっ！ 確か、声こゑがした。何か話したそうにしている。よかった！」

下里さんには、たった数分間の沈黙ちんもくでしたが、とても長く感じられました。高鳴たかなる胸を抑えて、じつと次のひと言を待ちました。

「父、いません。早く亡なくなったの」

彼女が小さな声で話してきました。

「そうだったの。それは気の毒に……」

いろいろと困こまっただらう」

「……だからね、母が、それからずっと働きに行つとるんです。お勤めは初めてだったし、朝六時ごろ出て帰りは七時過ぎになるもんで、いつも疲れるみたい」



「大変やねえ。家の中のこと、手伝つと  
るの？ たまには、お母さんの話し相手  
になってあげてるの？」

「家に八十四歳になるおばあちゃんが  
いるんですけど、二年前から寝たきりな  
んです。晩から朝までは、母と私と弟の三  
人が分担を決めて世話してますが、昼間  
はだれもないでしょ。それで近所の人  
に世話してもらつとるんです。でも、お  
ばあちゃん、つらいらしくて泣いてばか  
りいるんです。早く元気になってほしい。  
かわいそうで、かわいそうで……」

「お母さん、体は大丈夫なの？ お母さ  
んにもうしばらく頑張がんばつてもらつて、あ  
んたらが社会に出たら、おばあちゃんや  
お母さんに恩返しおんがえししな、いかんねえ」

「母さんには、いつも感謝してます。今  
のところ元気ですし、生活もどうにか  
やっていけるみたい……」

涙をふきながら、また黙り込む彼女。





# 心が開くとき

彼女は下里さんと出会って、いっしょに駅から田舎道を歩きながら、少しずつ心が開かれていったようです。

早くに父親を亡くした彼女が、偶然に出会った下里さんに、自分の父親像を重ねて心を開くのは、ごく自然な心情といえるでしょう。しかし、そればかりではないようです。

故郷を愛し、恩返しのできる「百万歩」を行く下里さんからにじみ出る言葉やその口調、まなざしや表情、ものごしなど、いわば下里さんの人柄が彼女の安心感を引き出し、心を開かせたのです。

二人の散歩は続きます。

しばらくすると、突然、彼女が話題を

変えました。

「私、看護婦になりたいんです。病氣の人、看護してあげたい。寝たきりのお年寄り、介護してあげたい」

「ああ、そうだったの。おじさんね、昔、病院で仕事をしていたことがあるんですよ。知つとるけど、看護婦さんは、とつてもやりがいがある尊い職業だよ。だが仕事は大変だ。強い信念や忍耐力がないと勤まらないよ」

「詳しいことは分かんないけど、私、頑張れると思う。絶対になりたい。今、こそつと受験勉強しとるんですが、時間がないし、お金もないし、肝心の頭もよくないし……。それでも、私、合格するまで何回でも挑戦します。おじさん、どう思う？」

そう聞かれて下里さんは困りました。

彼女のまなざしからは信念の固さが感じられます。でも、自分には何もしてあげられないのが、つらかったのです。

「そのこと、誰かに相談したの？」

「いいえ。まだ、誰にも」

「それはどうだろう。少なくとも、先生や家族には早く相談して、きちんとしておいたほうがいいよ。大事なことなんだから。それに、これからみんなに迷惑をかけることになるし……。誠意をもって話せば、きっと理解していただけたと思うよ」

「……」

「決心した以上、初志貫徹だよ！」

その言葉を聞いて、急に彼女に笑顔がよみがえりました。



「そうですね。ありがとう、おじさん。つらいけど、帰ったらみんなに言います。今日は、思い切っておじさんに話してよかった。何だか、ものすごく元気が出てきちゃった。ありがとう！」

すっかり明るくなった彼女が、「ありがとう」と、何度も頭を下げるしぐさに、

下里さんは自分のほうが彼女からエネルギーをもらったような気分でした。

「迷わず、挫けず、立派なナースをめざして精いっぱい頑張つてほしい。そしてみんなのご恩にも報いてほしい」

下里さんは彼女の前途を祈るだけでした。

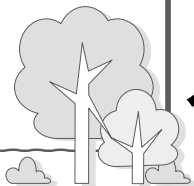
「やすらぎの森」が見えてきました。下里さんがお礼を言ったあとで聞くと、彼女の家は、無人駅から反対のほうへ二キロ近く行った所でした。下里さんは胸に込み上げてくるものを感じました。

「ありがとう……」

「おじさん、さようなら！」

大きく手を振りながら、笑顔で引き返していく彼女の姿は、下里さんには忘れられないものとなりました。





# 人を“価値づけ” しない愛

この出会いを、下里さんは次のように振り返っています。

「彼女の思いが痛いほど分かりました。自分の娘のように感じてきて、心から彼女の前途を祈りたくなりました。何もしてあげられないので、祈るしかないのです。気のきいたアドバイスをしてやろうとか、恩に着せようなどという気持ちは、微塵みじんもありませんでした。

お互いに名前も知らない一度きりの出会いだから、お互いに相手に求めるものはありません。真剣に話を聴きいて、真剣に祈るだけでした」

心がふれあう出会いには、一度きりの出会いでも、長年の付き合いでも、共通するものがあるようです。



臨床心理学者の杉田峰康すぎたみねやす氏は、『人を育てる「愛のストローク」——無条件のふれあい子どもは変わる』（モラロジー研究所刊『生涯学習ブックレット』）の中で、

次のように述べています。

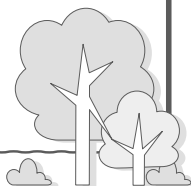
——相手が「かわいいから」とか、「言うことをきくから」「良い成績をとるから」



「経済的に豊かだから」、だから大事にする、というような自分にとって都合のよい条件づけ、価値づけをした愛情ではなく、「あなたが存在していることが大事」という気持ちで人と接すること、つまり条件のつかない大きな愛が本当の愛なのです（要旨）——。

私たちは人とかかわるとき、自分の期待に<sup>こた</sup>えてくれた相手や自分の価値観<sup>かちかん</sup>に合う相手を、評価したり、大事にしようとする気持ちが、知らず知らずにはたつきやすいものです。

だからこそ、自分にとって損か得かということではなく、まず相手のことを認め、相手の幸せを祈る心のはたらきだけに自分の思いを集中させて、相手と接していくことが大切です。



# 次世代に 伝えたい「分別」

下里さんと女子高校生とのふれあ  
いには、もう一つの面があります。

ものごしの柔らかい、優しい下里  
さんですが、話す言葉の端々には、  
仕事の厳しさや周囲との調和、感謝  
と恩返しの大切さなど、いわば  
「分別」がにじみ出ています。

彼女の夢や「こうしたい」という  
欲求を、安易に聞き入れていただけ  
ではありませんでした。彼女の苦労  
や悩みを理解したうえで、分別を  
もって発した「初志貫徹！」だったから  
こそ、下里さんの思いが彼女の心に届い  
たのに違いありません。

大人が次の子ども世代に「分別」を伝  
えることはとても大切なことです。京都  
ノートルダム女子大学の梶田叡一学長

は、次のように述べています。

——もちろん、子どもも一人の人間と  
して尊重され、その自主性・自発性は尊  
重されなければなりません。しかし、そ  
の前に、大人が「ここは我慢しなさい」  
「ここはこうですよ」と教えなくてはな  
らない点があるはずですよ。これが「分  
別」です。（中略）

教育というのは、人類が長い時間をか  
けてつくり上げてきた「分別」を子ども  
に理解させ、その「分別」によつて子ど  
もが自分自身をコントロールできるよう  
にする、あるいは、「分別」と自分の姿と  
を照らし合わせて自己内対話（自分自身  
の中で対話すること）のできるようにす  
る、ということであるはずですよ——

（『基礎・基本の人間教育』金子書房刊）

# 生み出そう、 「心がふれあう出会い」を

人生は出会いと別れの繰り返しです。その中でキラリと光る、心に深く刻まれる出会いがあります。それは、大きな愛で包まれるような安心感にふれたときであり、また、自分の生き方や人生の指針となるものにふれたときであるといえるでしょう。

「心がふれあう出会い」は、荒んだ心をよみがえらせ、人がよりよく生きていくためのエネルギーを生み出します。私たちも、そうした出会いを生み出す努力を、まず自分からしていきたいものです。

